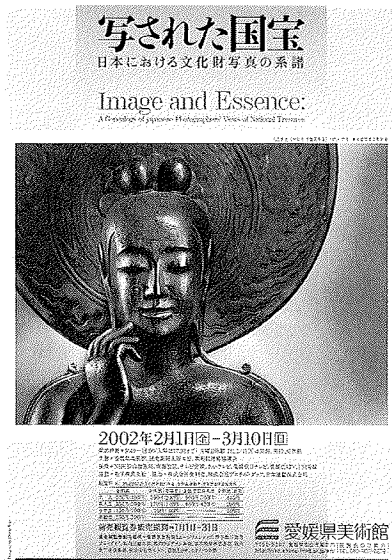


(報告) 企画展「写された国宝」ギャラリートーク 「文化財と出会う方法!？」の試みから

鈴木 有紀

1 はじめに

当館では、毎月第2、第3土曜日の午後一時間程度、来館者に対し、美術作品に親んでもらうことを目的としたギャラリートークを実施している。このギャラリートークは、その時期に展示されている常設展示室・特別展示室の展示内容から担当者が自由にテーマを設定し、作品について来館者とともに考える、というのが基本的なスタイルとなっている。また、その他にも年間6回実施される企画展において、その展示内容と規模に応じた形でギャラリートークを行っており、平成14年2月1日から3月10日にかけて開催した企画展「写された国宝 日本における文化財写真の系譜」(資料1)でも、期間中3回、それぞれ異なる学芸員が展覧会についてのギャラリートークを行った。



資料1

この企画展「写された国宝」は

写真に写された国宝や重要文化財の歴史をたどり、明治から現代までのそれぞれの時代の写真家

がどのような視点で文化財をとらえ、表現してきたかを検証し、写真が文化財の保護や指定に果たした役割を明らかにするとともに、現代の私達が知らず知らずにもっている、文化財を美術品として鑑賞する視線＝日本人の美意識がどのようにして生み出されてきたかを探ろうとする⁽¹⁾

事を目的とするものである。そして展覧会期間中、会場には、明治時代からの貴重な文化財調査の写真から入江泰吉や土門拳の他、現在活躍中の写真家まで彼らの生み出した作品が、Ⅰ 明治期の文化財調査、Ⅱ 商品化された古美術写真、Ⅲ 職人の眼と技術、Ⅳ 作家性の芽生え、Ⅴ 報道写真としての文化財写真、Ⅵ 個性的な作家たち、という6テーマのもとに展示された。(資料2)

ここでは、この平成13年度に開催した企画展「写された国宝」において実施したギャラリートークのひとつ、「文化財と出会う方法!？」のプログラムの試みについてその内容を紹介するとともに、実施結果を振り返り、今後展示プログラムを作成する際の課題を述べてみたい。

2 実施概要とプログラムの流れ

まず、はじめに実施概要とプログラムの流れについて紹介する。

(1) 実施日時

- ・平成14年2月17日(日)午後2時30分～3時30分の1時間程度

(2) 実施場所

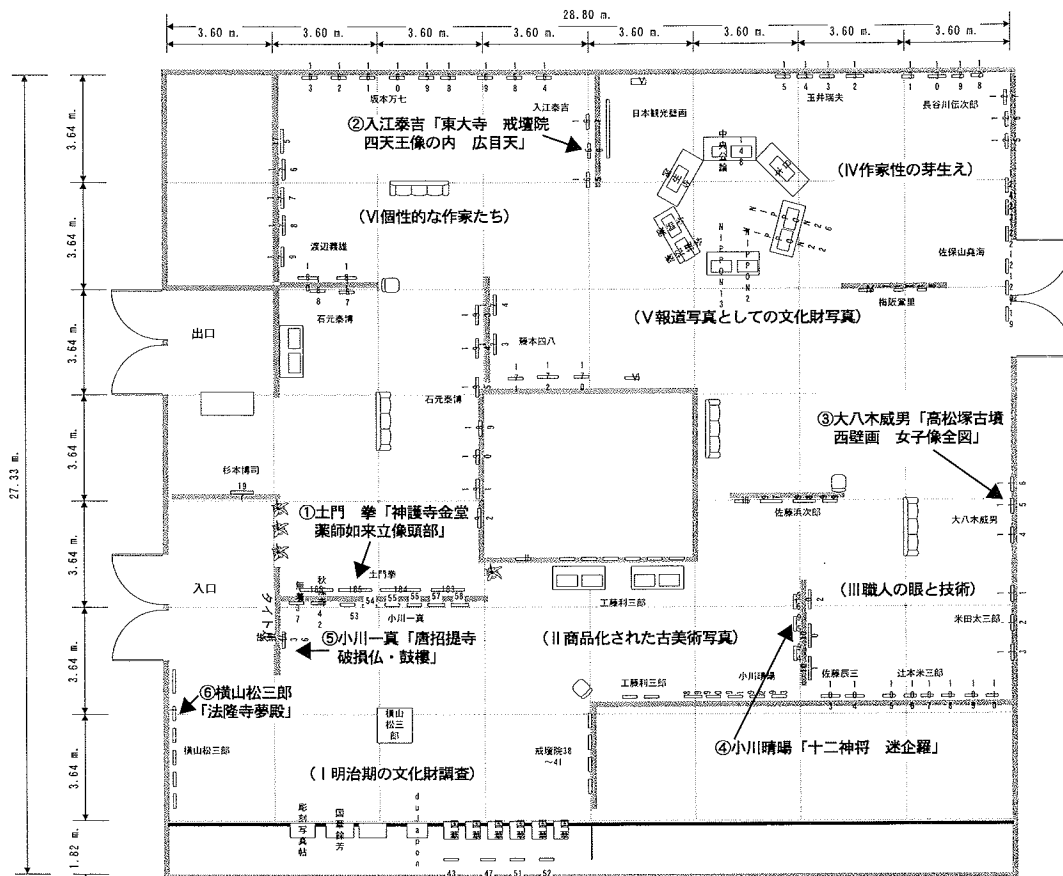
- ・美術館一階企画展示室内(展覧会会場)

(3) プログラムの対象、人数

- ・主には企画展示を訪れた大人15名程度

(4) プログラムの目的

- ・写真や美術についての専門的な事前知識があ



資料2 展覧会展示図面 (図面中の①～⑥は作品について、参加者と展示室内を回った順番)

まりなくても、美術館を楽しんでもらえるような場を作る。(得手不得手感のない場づくり)

- ・参加者個人の展覧会作品との対話(観察、比較等)と、参加者全員でのそれらの共有という体験を通じて、企画展示と美術館に親しみを持ってもらう。

(5) 準備物

- ・文化財写真を利用した記念切手や絵葉書
- ・新聞等に掲載された文化財関係の記事などの切り抜き資料(写真2)
- ・各展示テーマを代表する作品カード(写真3)

(6) 主なプログラムの流れ

① 簡単なオリエンテーション(15分程度)

- ・あいさつ、(担当学芸員の)自己紹介。
- ・これから何をテーマにプログラムを進めるのか、要する時間はどれくらいか、途中で抜けても良いこと等のプログラムの見通しに関する説明。

- ・写真技術の発達によって、すでに日常生活の中に新聞記事やカレンダー等の様々な形で溶け込んでいる「文化財写真」についての再確認。

- ・参加者自身の自己紹介とそれぞれの持つ文化財との「出逢い」体験を紹介してもらう。

② 作品との対話1(10分程度)

- ・「小川一真 “唐招提寺 破損仏・鼓樓”」、
「小川晴暘 “十二神将 迷企羅”」、
「大八木威男 “高松塚古墳 西壁画 女子像全図”」、
「入江泰吉 “東大寺 戒壇院 四天王像の内 広目天”」、
「土門 拳 “神護寺金堂薬師如来立像頭部”」ら各テーマ毎の代表的な作品をカードにしたものを参加者に手渡し、展示室内でそれらの作品を捜してもらい、各自作品と向き合ってもらおう。

③ 作品との対話2(30分程度)

- ・各自向き合った作品について、感じた事や

思った事等をありのまま紹介してもらい、参加者の話を中心に、その他の参加者と学芸員の全員で各作品について話し合っていく。

④ まとめ、ふりかえり（10分程度）

- ・これまで一緒に見てきた作品について、カードを時系列に並べながら、文化財写真の変遷とその果たした役割について振り返る。
- ・プログラム終了のあいさつ。

3 来館者とのやりとり

当日の参加者は美術史のレポート作成のため、展覧会を訪れたという大学生の女性1名、新聞社でカメラマンをしているという男性1名、50代くらいの夫婦の方一組、他、30代と60代くらいの女性2名の計6名という構成であった。

当館のギャラリートークでもよく見られる風景であるが、日本の多くの博物館・美術館で見られるギャラリートークは欧米のそれとは違い、作品や資料をめぐる参加者との活発なやりとり、というよりはどちらかというと作品の解説会のような様子であり、学芸員の話に参加者は受身がちなようである。これに対し欧米の博物館のギャラリートークの様子を見ていると、参加者は学芸員が展示室で話すある物事について、自分の疑問や考えを臆することなく言葉にして学芸員と話し合っている姿が見られる。そして、たまたま偶然そこに居合わせた他の参加者とともに、お互いの考えを深く掘り下げていくその様子は文化的な背景等の違いがあるとはいえ、見ていて非常に面白く、そのような環境が在ることに素直に羨ましさを感じる。しかし、だからと言って欧米の様子が優れていて、日本が劣っていると述べてしまうのは早急である。今回の試みはそのような、展示作品に対して来館者が考えていることを、まずは知りたいという思いもあり始めたものであった。

プログラム開始当初、普段とは少し違う展開に参加者は少し戸惑った様子であったが、手順を説明する段になると「面白いかも」と言った声が聞かれ、作品のカードを持ってそれぞれ展示室に散って行っ

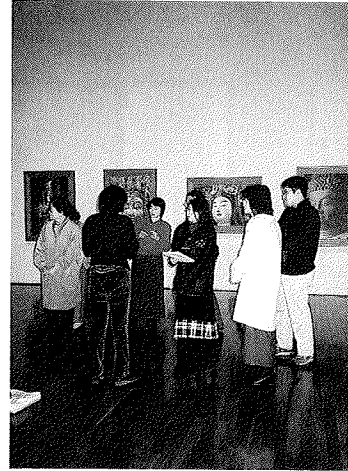


写真1 プログラムのオリエンテーション

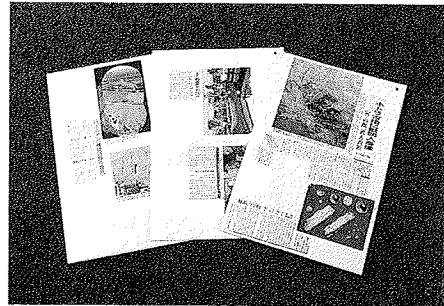


写真2 新聞等の切り抜き資料

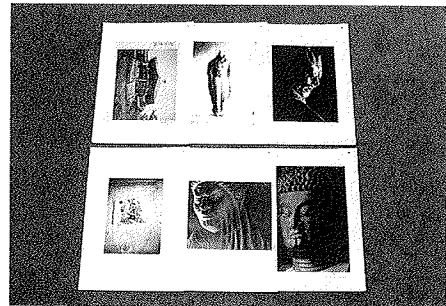


写真3 作品散策用のカード

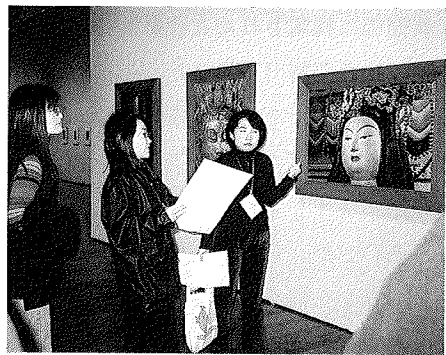


写真4 ①土門拳「神護寺金堂薬師如来立像頭部」について、印象を語る参加者

た。(写真1)その後、再び参集し、プログラムの展開を行った。その際、あくまでも中心は参加者であり、学芸員は参加者とその他の参加者の間に立ち、それぞれから発せられる言葉をつなげたり、作品に関して参加者の言葉に若干の補足や情報を加えたりと、終始、参加者のファシリテーター (facilitator: この場合は参加者自身が作品を見て、自らにとっての意味を見出していく過程を助長する役割の者の意) の役に徹した。なお、作品について参加者から発せられた言葉をまとめたものについて、次のとおり紹介する。

- ① 「土門 拳 “神護寺金堂薬師如来立像頭部”」について (写真4) (参加者: 大学生の女性)
- ・写真の赤い色がとても強烈で、この色によって仏像の印象や迫力が更に増している。
 - ・すべてがはっきりしていて、どん!とせまって来る。この仏像に対する作家の強い思い入れが感じられる。この作家の他の作品についても強くそれを感じる。

- ② 「入江泰吉 “東大寺 戒壇院 四天王像の内 広目天”」について (写真5)
- (参加者: 新聞社に勤めるカメラマンの男性)
- ・この、睨んでいる視線の先に何があるのだろうか、という気持ちにさせられる。
 - ・自分はこの像を東大寺で見たことがあるけれども、その時は、恥ずかしながらこんな風には見えなかった。この写真のこの方向からの撮り方はすごいと思う。この広目天のまとう空気までも感じられる。

- ③ 「大八木威男 “高松塚古墳 西壁画 女子像全図”」について (写真6) (参加者: 60代の女性)
- ・私は、この絵を昔、友達と奈良に旅行した時に見たことがあります。いつだったか…。色のとても綺麗な感じだったことを憶えています。いつだったろう…。



写真5 ②入江泰吉「東大寺 戒壇院 四天王像の内 広目天」について、印象を語る参加者



写真6 ③大八木威男「高松塚古墳 西壁画 女子像全図」について、印象を語る参加者



写真7 ④小川晴暘「十二神将 迷企羅」について、印象を語る参加者



写真8 ⑤小川一真「唐招提寺 破損 仏・鼓楼」について、印象を語る参加者

④ 小川晴暘「十二神将 迷企羅」について（写真7）
（参加者：30代の女性）

・この黒い部分がとても印象的で……。この神さま？の怒っている様子がよくわかります。迫力がある。

⑤ 「小川一真「唐招提寺 破損仏・鼓樓）」について（写真8）
（参加者：50代の夫婦）

・これは、わざとこういう風に撮った写真なのか？ 非常に美しく出来ている。
・この仏像は、なぜ、顔と腕がないのですか？
・でもとても美しい仏像ですね。

※ なお、⑥番目の作品「横山松三郎「法隆寺夢殿）」については、参加者の人数等の関係により学芸員が作品の紹介を行った後参加者全員で鑑賞を行い、まとめの作業を行った。（写真9・10）

4 今後の課題——来館者研究の必要性

今回のプログラムは、まずは展示作品に対する来館者の考えを知りたいという思いから始めたものであった。そして、限られた時間の中、ほんの一部ではあったが参加者それぞれに異なる作品との向き合い方を見ることができた。そして参加者とのやりとりの中で改めて気付いたことは、参加者自身の思いや「経験」を学芸員が理解し、それらと作品とをつなげることが出来た時、（参加者自身の「経験」と作品がつながった時）参加者はその作品についてより親しみを覚える、ということである。このことは、プログラム終了後参加者（30代女性）から寄せられた「自分の思っていたことと作品の話が、あまり違わないのでうれしくもあり、驚きもあり…」といった声や60代女性からの「最初（作品について）自分の話をするのは何だか不思議な感じがしたのですが、そのことと、みなさんのお話やあなた（学芸員）のお話があまり離れていなかったで、わかりやすかったです。今日の出来事は大変楽しかった。」という声にも表されているように思う。しかし、この「参加者の経験」については、次のような声もあった。

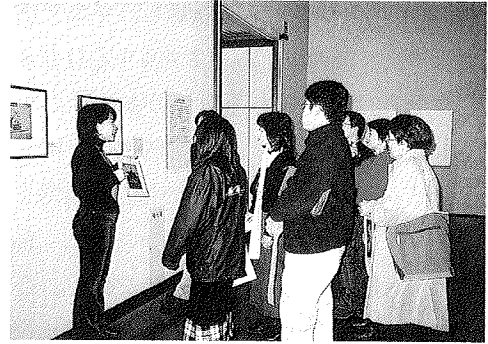


写真9 ⑥横山松三郎「法隆寺夢殿」についての解釈を説明



写真10 まとめ・それぞれのカードを時系列に並べ、文化財写真の変遷について説明

プログラム終了後、カメラマンである参加者の男性から、「写真技術のうつりかわりについても、少し知りたかった」という希望が聞かれた。このプログラムは担当者がふだん美術館を訪れる来館者の様子とこれまでの経験から憶測して、専門的な話は極力抑えた形で進めていた。この男性の希望に対し、その場では図録による説明と関連施設等の紹介を行ったが、この憶測に頼ったプログラム作成については後日考えさせられることが多かった。

確かに、このようなケースに出遭った時に、例えば写真の専門的な技術について研究を行う学芸員に話をつないだり、または関連文献を紹介したり、それらを扱う博物館等を紹介することは大切なことである。「ここ（美術館）にはあなたの知りたい事の全ての情報はなくてもいいかもしれませんが、どこそこにはあります。こういう方法で調べることが出来ますよ。」と来館者の知りたい事の入手先の情報を知っ

ておくことは大切である。その情報をもとに来館者は自らの興味関心に従い、自己学習を進めていこうし、それは博物館で行われる学びの形として大切なことである。しかし、もし今回のプログラムを実施する前に、想定されるプログラム対象者層に対して、①展覧会テーマである文化財写真や写真技術について既に知っていることは（経験していることは）どんな事か、そして、その経験からくる知識や概念、感情、価値観にはどんなものがあるか、②展覧会テーマに関し誤解していることはないか、あるとしたらどのような事か、③展覧会テーマから何を知ることができるか、期待していることは何か等、あらかじめその様々な反応について調べ、そしてそれらをふまえたプログラムの準備を行っていたならば、この参加者の男性の満足も得られたのではと思う。また、「今回のプログラムは参加者が理想的なグループだったから成功したのであって、そうでなければどうなっていたかわからない」というような、その時々偶然ともとられる来館者の反応にプログラム内容が大きく左右されないためにも、やはり事前に来館者の様々な「経験」について調査を行い、それらを考慮した丁寧な準備を進めることは、これから企画を実施する上で非常に求められるのではないだろうか。

近年、少しずつではあるがこのような来館者についての調査を行いながら展示やプログラムを開発していく、「エバリュエーション」(evaluation: 展示評価の意)⁽²⁾と呼ばれる活動が取り入れられ始めている⁽³⁾。その規模は館によっても異なり、外部機関に調査の委託を行う所もあり、調査範囲も館全体を対象としたものから、教育プログラムまで様々である。「評価」と聞けば、何か展示やプログラムに対して点数を下されるような、マイナスな印象を与えがちであるが、これはそうではない。

この「展示評価」は、博物館・美術館を訪れる来館者を理解し、館が展示をとおして伝えたいことをどのようにすれば来館者に伝えることが出来るか、すでに在る展示ならばどのように改善すれば、来館者に伝えたいことが伝わるのか等の前向きな方向性を探るものである。そして、効果的な「展示評価」

を行うためには、普段から、自分の接する来館者について考え、理解を深めること——来館者についての研究を行うことが必要である。

来館者について考えることは、何も大規模な調査でなくとも展示室内で来館者の言葉に耳を傾け、少し話しかけたりすることから始められる。来館者とつながる展示やプログラムを作っていくためにも、まずは出来るところから始めようと思う。

註

- (1) 展覧会図録『写された国宝—日本における文化財写真の系譜—』(2000、東京都写真美術館) p.5
- (2) 『琵琶湖博物館研究調査報告 ワークショップ&シンポジウム 博物館を評価する視点 琵琶湖博物館・滋賀県博物館ネットワーク競技会編』17号 (2000、滋賀県立琵琶湖博物館)
展示評価 (evaluation) には基本的に3つの段階があるとされ、展示やプログラムの内容等を決定する際に利用される企画段階評価 (front-end evaluation)、展示やプログラムの開発段階で行われる制作途中評価 (formative evaluation)、完成されたプロジェクトに対し、そのねらい、目標、コスト、完成するまでにかかった時間等、どの程度成功したかを評価する総括的評価 (summative evaluation) があげられる。
- (3) 例えば平成13年度に江戸東京博物館において開催された企画展「東京建築展」はその企画段階からこの展示評価を取り入れて制作されている。また、国立民族学博物館より発行の小学生を対象とした展示を見るためのシート、「みんぱくトピックシート」も、この展示評価をもとに作成されたものである。

参考文献

- 井島真知「ミュージアムエデュケーターとして考える教育と展示」日本展示学会誌『展示学』第28号 (1999、日本展示学会) pp.64-70
- アイリーン・フーバーグリーンヒル 竹内右里聞き手・翻訳 前田裕美翻訳協力「来館者とは能動的なインタープリター 博物館は充分な解釈学的哲学を持つべき」『Cultivate 特集 インタープリテーションと博物館』19 (2003、文化環境研究所) pp.10-17
- 高橋順一訳『博物館体験—学芸員のための視点』(1996、雄山閣出版) Falk, John H, and Dierking, Lynn D, *The Museum Experience* 1992, Whalesback Books